美術

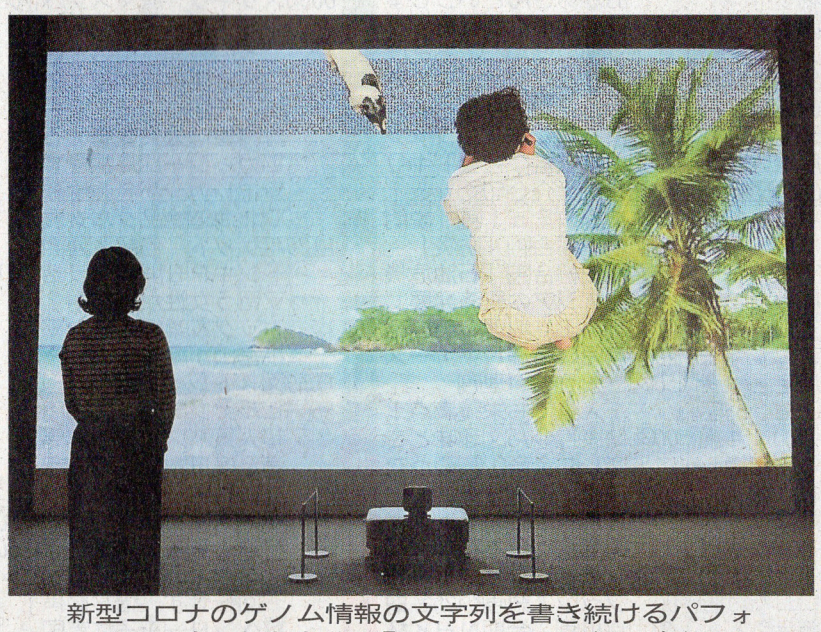
不確かな世界と向き合う

「山下麻衣＋小林直人」が大規模個展

映像インスタレーションの制作を主に手掛け、国内外で活躍する千葉県出身・在住アーティスト「山下麻衣＋小林直人」による大規模個展が県立美術館（千葉市中央区）で開催中だ。ウイルスを示す膨大な文字情報をほぼ1日がかりで書き連ねたり、蜃気楼（しんきろう）を頼りに巨大な「∞」マークを浮かび上がらせたり…。2人の映像作品は、どれもちょっと風変わりな視点から世界を捉え直すものばかり。その背景には、世界の「不確かさ」に真摯（しんし）に向き合おうとする一貫した姿勢がある。

（平口亜土）

県内の高校美術部で出会った山下麻衣(46)と小林直人(48)は2001年から公式に活動を開始。ともに東京芸大大学院を修了後、ドイツに渡って活動。12年に帰国後、地元・千葉を拠点とし、国内外の芸術祭や展覧会で作品発表を続けている。



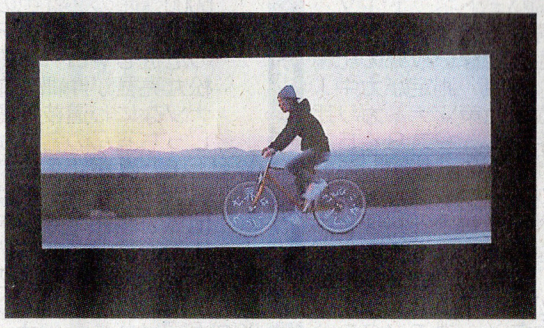
新型コロナのゲノム情報の文字列を書き続けるパフォーマンスを記録した作品「ＮＣ＿045512」(2023年)

作品58点で構成される過去最大規模の今展覧会のタイトルは、「もし太陽に名前がなかったら」。人間が行う「名付け」という行為を見つめ直す意図が込められているという。

世界は「不確かさ」に包まれている。例えば、宇宙はどこまで続いているのか。なぜ人間は生きているのか―。東日本大震災や新型コロナウイルス禍といった日常が大きく揺らぐ出来事を経験する中では特に、そうした思いを強くする人も多いだろう。

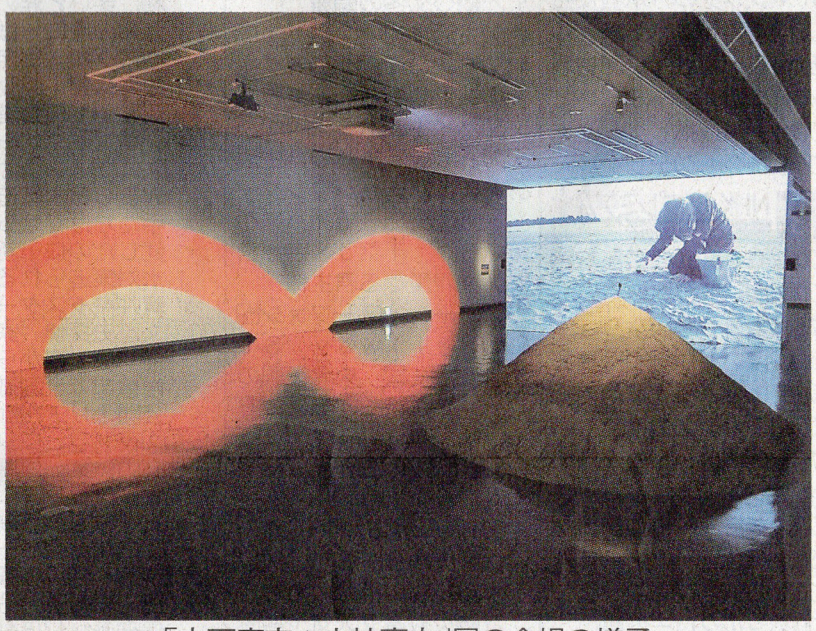
不確かさを人は恐れ、あらゆる方法で対処を試みる。「名付け」はそんな行為の一つ。空に浮かんだ燃え上がる何かを「太陽」と名付けて人は安心を得る。しかし、本当に安心につながるのだろうか。逆に、名付けが世界の自由なあり方を制限しているのではないか。2人は作品を通じて、そんな問題意識と向き合う。

最新作「ＮＣ＿045512」は新型コロナに人類がどう対処してきたのか、彼らなりの視点で表現する。約3万文字のアルファベットで表されるコロナのゲノム情報。それらを山下が読み上げ、小林がひたすら書き続ける13時間ものパフォーマンスの様子を記録。その映像の背景にはオンライン会議のバーチャル背景を合成し、投影先のスクリーンは2千枚のマスクを縫い合わせて仕上げた。ほぼ1日がかりのパフォーマンスは大変な労力で、未知のウイルスに必死にあらがおうとしてきた人類の姿を改めて想起させる。



「世界はどうしてこんなに美しいんだ」(2019年)

蜃気楼で有名な富山県黒部市で行った屋外プロジェクト（2021年）も、人類と自然の関係性を考える作品。市内の護岸に巨大な「m」型看板を設置し、蜃気楼を活用して「∞」マークを出現させた。鑑賞者は出現するかどうか分からない自然現象を前に、「不確かさ」への期待と不安を交錯させることになる。



「山下麻衣＋小林直人」展の会場の様子

09年には旭市の飯岡海岸で磁石を使って砂鉄を集め、工房でスプーンに仕上げる過程を記録。自然物質から日用品を作り、それをごみとして捨てるという人類の自然への向き合い方を問い直した。

「世界はどうしてこんなに美しいんだ」という言葉を自転車のホイールにＬＥＤライトで映し出しながら瀬戸内の夕景の中を走り、世界の美の在りかを探った作品（19年）、海辺に寄せる波を延々と数えて、自然そのものの姿を提示しようする作品（07年）も印象深かった。世界の新たな輪郭を提示する作品の数々は、我々に不確かな世界を生き抜くためのヒントを与えてくれる。

■千葉県立美術館

（千葉市中央区中央港1―10―1）

「山下麻衣＋小林直人 ―もし太陽に名前がなかったら―」は21日まで。9時～16時半。月曜休館。一般300円、高校・大学生150円。第4期コレクション展「名品4―旧制千葉中学から広がる堀江正章の系譜―」同時開催。☎043（242）8311。